日本語力をあげるための私の方法ー「日本語教育能力検定試験」の勧め

清水　由美子

日本語支援にご尽力されている皆様、関心をお持ちの皆様、楽しく勉強・交流されていらっしゃることと思います。

でも、教える日本語は難しいですよね。
“もっと上手に教えたい”"もっと簡単な説明があるのではないか“”もっと伝えやすい教え方があるのではないか“と、たくさんの”もっと“を探求していらっしゃいませんか。

そして「早く日本語力を上げて楽になりたいけれど独りの勉強は怠けてしまう」「今、学習者との縁がなく時間があるけれど何を勉強したらいいかわからない」という悩みありませんか。

この場を借りて僭越ながら、私が使っている少し変わった勉強方法をご紹介したいと思います。それは「『日本語教育能力検定試験』の勉強」をすることです。

先にお断りしておきます。私はＪＥＥＳ(試験を主催している団体)の回し者ではありません。そして「試験」を受けろと申したいのでもありません。勉強の手段に「日本語教育能力検定試験」に纏わる「参考書・問題・気が向いたら受験」を利用することをご紹介したいのです。
（＊「日本語教育能力検定試験」については文末に概要が載せてありますのでご覧ください。）

また「日本語教育能力検定試験」の「試験」としての出来不出来、またその合格水準、資格としての有効性に対し、有識者の方々からは様々なご意見があるようです。でも私は「試験」としての優良ではなく、日本語の学習の手段としてお勧めしたいのです。

以下にその項目と理由を述べます。

１．　学習の目的に使える。
＊ 学習者がいなくて具体的な教授項目がなく、何を勉強したらいいのか、どこまで勉強したらいいのかわからないという時、自分のレベルを測ることができるので学習の目標が立てられます。

２．　自分の知識が整理できる。
＊充実した問題集を解くことで知識の穴埋めができます。

３．　参考書が充実している。
＊今のお勧めは『日本語教育能力検定試験に合格するための○○○』（アルク）シリーズ。○○○には“基礎知識”“文法”などが入り 10 冊が刊行されています。もちろん半分はボランティアの現実には必要のない本。自分に必要な本だけ選べばいいのです。でも受験参考書として内容が整理されているのでとてもわかりやすいし、完読すれば合格水準クリアかもしれません。

４．　自分の教えている事が全体の中でどういう意味をもっているか意識できる。
＊ 出題範囲は日本語教育全般に渡っているので総論を勉強する事で各論の位置、意味、重要性が理解出来ます。

５．　苦手なこと（聴解・発音指導等）にも取り組むきっかけになる。
＊苦手以前に聴解・発音などは地方にいたら学ぶ手段は滅多にありません。

６．　合否はともかく受験を決意すると学習効果が上がる。
＊ 受験日が決まっていることで嫌でも勉強せざるを得なくなります。試験日近くなると無意識に勉強に割く時間の優先順位が上がります。部屋に埃も溜まりますが、比例して知識も貯まります。

７．毎年発行の対策本で勉強する事で新しい論、語彙を知ることができ、時代に遅れずにすむ。

８．記憶の喪失をカバーする手段になる。
＊そしてこれが私にとっての一番大きな動機です。

実は私は既に何回か合格しています。でも受験を繰り返しています。それは私が「記憶」が苦手だからです。毎年、試験が近づくと手垢や書き込みで黒くなった参考書を初めて読むように読み返します。受験を始めた頃は少しも覚えられなかった事柄、語彙が、早い時間に思い出せるようになりました。でも受験をやめてブランクが出来ると次は老化も加わってすごく大変になるでしょう。学習者とのやりとりはその場勝負のところがあります。「忘れちゃった。次までに調べてくるね。」の言い訳は何度も使えません。また学習者が替わると私の場合、自動的に前のことが薄くなります。だから記憶が遠くなるのが怖くてやめられないのです。

ひとつ恥エピソードをご紹介します。
先日、クラス授業の時です。事情で十分な準備無しに臨みました。案の定そういう時、受講者から質問が出ました。「『音楽は世界の言葉ですね（『初級で読めるトピック 25』14 課）』とはどういう意味ですか。」 私は心で「しまった！比喩が来た」と焦りながらも、笑顔で「ほんと、どういう意味でしょう。皆さんどう思いますか？」と受講者に振りました。そこは大人の学習者、それなりの意見が出て、質問者を納得させてくれました。

何を言いたいかというと“比喩”なのです。これは検定試験に必出の問題です。必ず 1 問出ます。私は毎年 3 種の比喩を必死に覚えます。メタファー（隠喩・暗喩）は「月見うどん」、シネクドキ（提喩）は「花見」、メトニミー（換喩）は「きつねうどん」。きちんとそれぞれの比喩の概念を理解・記憶していればすぐ答えられたでしょう。でも忘れてしまった！　正解は「暗喩」。　直喩から「ようだ」をとった暗喩なので直喩に戻す、初級前半なら「ようだ」を使わずに意識して説明すればいいですよね。

「『音楽は世界の言葉』とは、“音楽は言葉とおなじに気持ちを伝えることができる。音楽は世界に通じる言葉とおなじようなものだ。”ということですよ。」で初級後半の学習者はわかったはずです。すぐに「暗喩」と閃いていたら･･･。でも今回覚えなおしましたし、毎年比喩の勉強繰り返していたからすぐ理解できました。半年はモツでしょう･･･。

以上の理由は私の独断と偏見かもしれませんが実感に基づいています。今の能力に自信はないけれど日本語を通して外国人の役に立つ事が嬉しい、だからもっと勉強したいという方がいらしたら私は勉強方法の一つに「『日本語教育能力検定試験』の勉強」を推薦します。そして、ついでに受験して学生時代の緊張感を思い出して浸るのはいかがでしょう。

ちなみに平成 22 年の関東地区の受験会場は明治大学、東京大学です。受験会場は選べませんが私には“東京大学駒場キャンパス”の受験票が届きました。東大の教室で試験を受けるのは 3 度目。しばし一日東大生になった気分で大学構内に佇みます。現実とのギャップでかえって落ち込みますが。　（平成 22 年 10 月 3 日）

日本語教育能力検定試験（にほんごきょういくのうりょくけんていしけん、Japanese Language Teaching Competency Test）は、財団法人日本国際教育支援協会（JEES）が主催し社団法人日本語教育学会が認定している、日本語を母語としない人を対象とした日本語教育の専門家として基礎的水準に達しているかを検定する試験である。

概要

- 国家試験や公的試験ではないが、本試験に合格した者は日本語教師の「有資格者」[1]とされる。

- 1986 年から始まる。2009 年度試験の開催地は日本国内 7 地域。毎年年に 1 度(10 月第 2 日曜日)実施されている。
- 2009 年度は、応募者数 6,277 人、受験者数 5,203 人、合格者数 1,215 人であった[2]。合格率は 23.4%。

- 試験は試験Ⅰ・試験Ⅱ・試験Ⅲの三部構成。

試験の概要

試験は一日で行われる。試験Ⅰが午前中に、昼休みをはさんで試験Ⅱ・Ⅲが実施される。

- **試験Ⅰ**（90 分、100 点）

  出題範囲の区分ごとに出題され、基礎的分析的知識・能力を問う。大問 15 問。全問マークシート方式。

- **試験Ⅱ**（30 分、40 点）

  聴解を含み音声に関する知識・能力を問う。大問 6 問。全問マークシート方式。音声を聞いて解答していく。試験Ⅰ・Ⅲと比べ時間は短いが配点率は高い。

- **試験Ⅲ**（120 分、100 点）

  日本語教師としての総合的な実践力を問う。大問 16 問。マークシート方式と一部記述式。覚えた知識を活用し、考えて解答する問題が出題される。最後の 1 問が記述式問題で、配点が高いと考えられる。